



錦大沼から望む樽前山

樽前山から噴出された火山れきによって雨水や雪解け水がろ過され、おいしい水が生まれています。



水道事業のPR活動



「とまチョップ水」の販売開始

厚生省（当時）と日本水道協会が毎年6月1日から一週間を「全国水道週間」と定め、昭和34年からPR活動を展開。水の量よりも質の向上が求められる時代となりました。

平成27年6月からは、苫小牧の水道水をペットボトルに詰めて「とまチョップ水」として販売。道の駅ウトナイ湖や苫小牧観光案内所、市役所売店などで取り扱い、大変好評をいただいています。

全国に誇れる「おいしい水」の歴史



苫小牧地方で確認される最も古い人類の生活跡は、約8000年前の縄文早期のもので、そのころは、現在の内陸部に海が入り込んでいた縄文海進の時代であり、人類は丘陵地に暮らし、海で漁をしながら河川を生活水と水路に利用していたと思われます。

次にアイヌ期に入ると、現在も水にまつわるアイヌ語地名が残っていることから、樽前山のふもとの湧き水を利用してはいたのではないかと推測できます。

やがて明治期となって、苫小牧では漁業が営まれるようになり、定住者が増えるとともに、川水や浅井戸を飲料水とするようになりました。大正期から昭和初期にかけて、水道創設の計画が幾度か持ち上がりましたが、資金不足をはじめ諸般の事情により断念。掘抜き井戸で良水を得た時代を経て、昭和25年ついに、積年の悲願とも言える本格的な水道事業が始まったのです。



苫小牧市水道事業 創設70周年を迎えて



苫小牧市上下水道部長 阿萬野 一男

本市の水道事業は、幌内川を水源に計画給水人口を28、100人とした昭和25年の創設事業着手から、今年で記念すべき70周年という節目の年を迎えることができました。

昭和27年の給水開始以降、市の発展を背景に水需要も伸び、2度にわたる拡張事業に取り組み、現在では給水人口約17万人、給水普及率は99.9%に達しており、水道は日々の生活に欠かせない重要なライフラインを担っております。

近年、水道事業を取り巻く環境は厳しさを増しており、人口減少に伴う水道料金収入の減少が予測される一方、老朽化施設

の更新や耐震化対策に要する費用は、今後も増加してまいります。

このような時代背景の変化を踏まえ、『いつも・いつまでも、みんなを支える上下水道』をキャッチフレーズとして、本年3月に「経営戦略」を策定したところであり、持続可能な事業の推進を目指し、未来に向かって新たな一歩を踏み出す節目の年と考えております。

また、皆様の日々の暮らしを支える水道事業について、より身近に感じていただけるよう、広報誌「水だより」の内容充実を図るとともに、SNSなど様々なツールを活用した情報発信と事業PRにも、より一層努めてまいります。

今後、安全で良質な水道水を安定的に市民の皆様にお届けすることを目指して、事業経営に取り組んでまいりたいと考えておりますので、よろしくようお願い申し上げます。